令和２年度
飯田市小中連携・一貫教育推進委員会

報　　告　　書

＜目　次＞

Ⅰ　飯田市小中連携・一貫教育の経過と目指す方向　……　2
Ⅱ　「探索期」「深耕期」の総括と「充実期」の位置づけ　……　3
Ⅲ　令和２年度の取組　……　4
Ⅳ　令和２年度の取組と検証
　Ａ　授業改善　……　6
　Ｂ　人間関係づくり　……　11
　Ｃ　９年間の教育課程　……　16
　Ｄ　組織の構築　……　17
Ⅴ　令和２年度の総括と令和３年度の方向　……　18
＜参考＞　飯田市小中連携・一貫教育推進委員会要綱　……　21

2021 年 2 月

飯田市教育委員会事務局学校教育課

Ⅰ　飯田市小中連携・一貫教育の経過と目指す方向

飯田市では、子どもたちの学力・体力の向上と生徒指導の充実および不登校問題などの教育的課題を解決するために、義務教育９年間を通した「小中連携・一貫教育」を平成 23 年度から展開してきている。

探索期と位置付けた４年間（H23～ H26）の特長は、与えられたものを受容するのではなく、市教委も、中学校区も、学校も「新たな価値」の創造を目指し、「できるところから始める」「それを積み重ねていく」ことを大事にしてきた。

９つの中学校区は各地域の実情に応じた連携・一貫教育の実践を積み重ね、それぞれのアプローチで教育的課題の解決と飯田市が掲げる子ども像に向かっている。

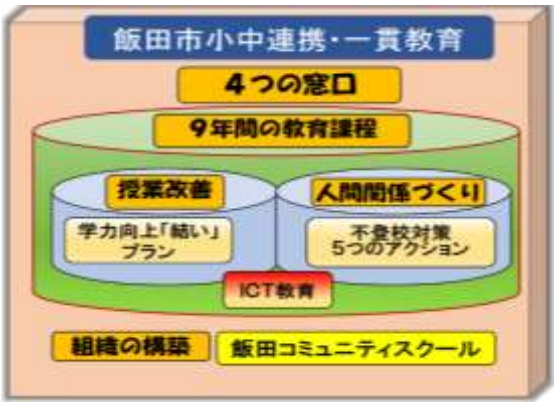
その中で、「小中連携・一貫教育」の実践が、当初の教育的課題の解決だけでなく、我が国や飯田市が直面している少子・人口減少社会に対応した活力ある学校づくりに向けて、有効な手段であることが見えてきた。

９中学校区の目指す子ども像が確立し、全中学校区の取組も２年が経過した H27 年度は、この小中連携・一貫教育の時間軸を「探索期」から「深耕期」へ、「形」から「質」への転換期と位置付け、「様々な資源」を活用しながら「質」の深まりと広がりに着目していくこととした。

具体的には、探索期は「質」の内容が整理されていなかったので、小中学校の先生方が校種を超えた協働を通して小中連携・一貫教育の内実を深く耕すために４つの窓口を位置付けた。

その４つとは、「授業改善」「人間関係づくり」「９年間の教育課程」「組織の構築」である。

また、H28 年度末に市内全小中学校が「飯田コミュニティスクール」に指定され、活動を始めた。子どもたちを中心に「小中連携・一貫教育」を縦糸に、「飯田コミュニティスクール」を横糸に捉え、学校と地域による協働を通して、飯田市教育ビジョン「地育力による 未来をひらく 心豊かな人づくり」を目指している。



Ⅱ　「探索期」「深耕期」の総括と「充実期」の位置づけ

（１）「探索期」・「深耕期」の総括

１　探索期（平成 23 年度～平成 26 年度）

・平成 23 年度、学力・体力の向上、生徒指導の充実および不登校問題などの教育的課題を解決するために、義務教育９年間を通した「小中連携・一貫教育」がスタートした。

・平成 24 年度、鼎中学校区・竜東中学校区をモデル校に指定。翌 25 年度から重点中学校区を決め、「できるところから始める」「それを積み重ねていく」ことを大切に考え、それぞれのアプローチでめざす子ども像の実現に向け展開を進めた。

２　深耕期（平成 27 年度～平成 30 年度）

・平成 27 年度からは、小中連携・一貫教育を「形」から「質」への転換をめざすために「４つの窓口」を位置づけ、「質」の深まりと広がりに着目した取組が進められた。

・平成 28 年度末には、小中連携・一貫教育をこれからも持続・発展させていくために、保護者・地域住民と一緒になって同じ目標に向かって教育活動を進めていく仕組みである「飯田コミュニティスクール」が全小中学校に導入され、活動を始めた。

３　成果

・授業改善では、「学力向上『結い』プラン」に基づく授業づくりの徹底が全市的に進むと同時に、中学校区ごとに小中合同職員会等が複数回開催されるようになり、学力や体力の課題分析をもとにした共通の取組が行われるようになった。

・人間関係づくりでは、取組当初において不登校児童生徒数が半減（H19 比）するなど大きな成果を上げることができた。後半はやや高止まりの状況が続いているが、チームによる支援や教育支援指導主事等の取組の充実により、中１ギャップを減少させることができた。

・９年間の教育課程では、小中共通の「授業規律」や「学習習慣」、「家庭学習の約束」などを決め出して指導を行ったり、９年間の小中一貫カリキュラム（総合的な学習の時間や外国語教育など）を作成・実践・修正したりするなど、学力・体力向上に向けた一貫性のある指導について共通理解が深められた。

・組織の構築では、市内全小中学校が「飯田コミュニティスクール」に指定され、子どもたちを中心に「小中連携・一貫教育」を縦糸に、「飯田コミュニティスクール」を横糸に捉え、学校と地域による協働活動を始めることができた。

４　課題

・「探索期」「深耕期」では上記のような成果をあげることができ、これらの好事例を様々な機会で共有することを通して飯田市全体への広がりが見られた。その反面、取組開始から８年が経ち、手段であるべき小中連携・一貫教育の取組そのものが目的化しているおそれがある。「めざす子ども像」にどこまで近づけたのか、あるいは「授業改善」によって学力・体力は向上したのか、「人間関係づくり」によって不登校児童生徒数は減少したのかなど、小中連携・一貫教育の取組による「子どもの変容」の具体的な検証と、それに基づく不断の改善が今後の課題と考えられる。

（２）「充実期」の位置づけ

平成 31 年度から「充実期」と位置づける。

〇めざす子ども像の「達成状況」と、達成のための４つの窓口から見た「取組状況」について、
〇具体的な「子どもの変容」に着目したＰＤＣＡサイクルによる継続的な検証・改善を推進し、
〇小中連携・一貫教育の次なる一歩を踏み出す。

Ⅲ　令和２年度の方向

（１）令和２年度　小中連携・一貫教育（各中学校区）の方向

１　めざす子ども像の達成や、達成のための４つの窓口から見た取組を充実させるために、各中学校区の「取組の重点」を保護者・地域とも相談しながら具体的に決め出し（可視化し）、それぞれ推進する。
２　「取組の重点」の進捗状況について、具体的な「子どもの変容」に着目した継続的な検証・改善を行う。

※４つの窓口から見た「取組の重点」（例）

１「授業改善」に向けて
・中学校区毎にめざす子ども像より、何ができるようになるのか（資質・能力）を共通認識し、そのために、何を学ぶのか、どのように学ぶのかの一貫性を研究したい。
・家庭学習と関連づけた授業展開の工夫等、授業へのＩＣＴ機器の導入も含め、従来の授業のあり方を中学校区毎、９年間を見据えて大きく見直す。

など

２「人間関係づくり」不登校児童生徒数の減少に向けて
・臨時休校が長期化する中で、登校のリズムがなかなかつかめずに、学校から足が遠のく児童生徒を出さないために、小中共通した児童生徒一人ひとりに寄り添った決め細やかな対応。
・今までの９年間で培ってきた、新たな不登校を出さないための取組を見直し、小中共通認識で指導にあたる。

など

３「９年間の教育課程」　めざす子ども像に向けた系統的な教育の取組に向けて
・新型コロナウイルス感染拡大の影響で、臨時休校が続き、家で過ごす時間が多くなり、各学校の教育課程を大きく見直さなければならない状況になっている。何を大切に考えて、何を効率的に扱っていくか、目指す子ども像に向けて、中学校区毎に共通の認識で教育課程の再編成を行う。

など

４「組織の構築」　飯田コミュニティスクールの充実に向けて
・学校運営協議会を通して、「めざす子ども像」に向けて「学校ですること」「家庭ですること」「地域ですること」の相互承認を行い、めざす子ども像の実現を図る。
・中学校区で合同の学校運営協議会を行うなどして、小中連携した組織を強化する。

など

（２）令和２年度　小中連携・一貫教育推進委員会の方向

１　推進委員会　年２回　※昨年度から回数を減らしている
・「（小中連携・一貫教育の）方針の策定及び全体調整を行う（要項第２条）」
・委員の構成は従来通り
２　部会　年４回（第１回部会は、第１回推進委員会時に行う）　※新規
・「調査研究を行うために部会を置くことができる（要項第７条）」
・部員の構成は学識経験者（2 名）、中学校区代表校長（9 名）、教育支援指導主事（14 名）、事務局。４つの窓口にかかわり研究を深める。結果を最終の委員会で報告。

（３）推進委員会・推進部会 日程

日時・場所	推進委員会 ※全員参加	推進部会 ※部員（名簿の☆）のみ参加
６月１１日（木） □推進委員会 14:30～15:50 □推進部会 16:00～16:45 飯田市役所 C311～C313	□第１回 小中連携・一貫教育推進委員会 〇委嘱状の交付 〇正副委員長の選出 〇研究協議 ・推進委員会の目的と昨年度までの経過の確認 ・本年度の方向と今後の予定について	□第１回推進部会 〇正副部長の選出 〇研究協議 ・本年度の方向と今後の予定について
９月８日（火） 14:30～16:30 飯田市役所 A301・A302		□第２回推進部会 〇研究協議 ・各中学校区の取組内容の発表、意見交換 ※原稿〆切 8/24
１１月２４日（火） 14:30～16:30 飯田市役所 A301・A302		□第３回推進部会 〇研究協議 ・各中学校区の取組の成果（子どもの変容）と課題の発表、意見交換① ※原稿〆切 11/11
１２月２３日（水） 14:30～16:30 飯田市役所 A301・A302		□第４回推進部会 〇研究協議 ・各中学校区の取組の成果（子どもの変容）と課題の発表、意見交換② ※原稿〆切 12/11
２月９日（火） 14:30～16:30 飯田市役所 C311～C313 ２月２５日（木） 13:30～15:30 飯田文化会館 会議室に変更	□第２回 小中連携・一貫教育推進委員会 〇研究協議 ・令和２年度の成果と課題 ・令和２年度実践報告書の発表（各中学校区） ※報告書原稿〆切 1/18 ・令和３年度の推進委員会のあり方について	

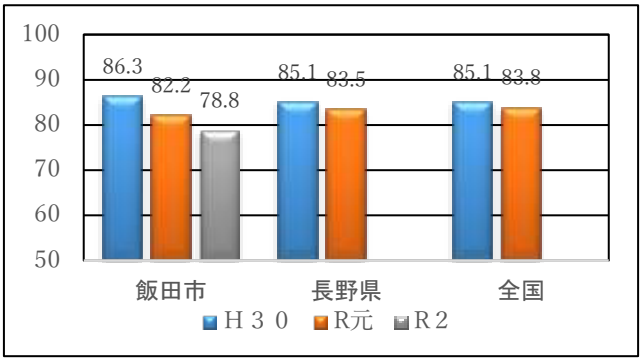
Ⅳ　令和２年度の取組と検証
～各中学校区実践報告書の「子どもの変容の姿」から～

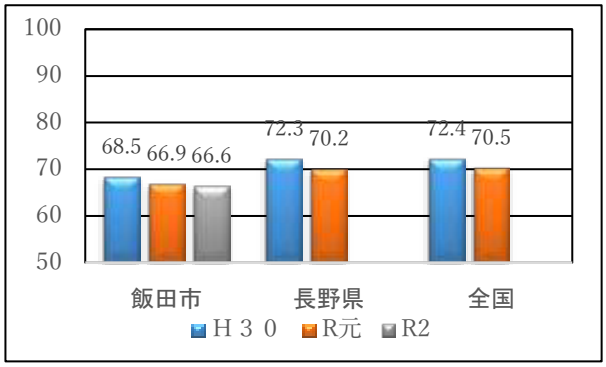
Ａ　授業改善

１　学力学習状況調査の視点から

【質問１】将来の夢や目標をもっている（主体的に学ぶ態度、学ぶ目的）

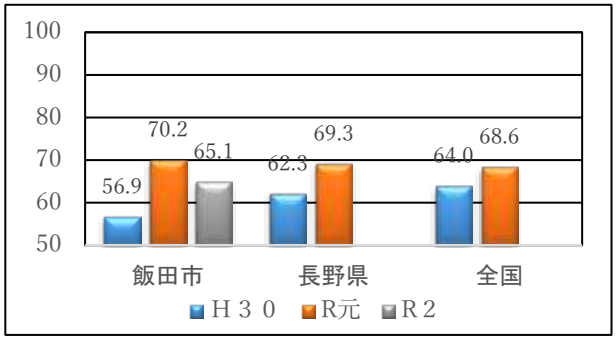
※それぞれのグラフは，肯定的な２つの回答（当てはまる・どちらかと言えば当てはまる）の合算を示している。
また，グラフの最小値は 50%としたが，50%を下回る数値がある場合は最小値を 30%としている。
本年度は、学力学習状況調査が行われなかったため、独自に調査した飯田市の数値のみ掲載している。



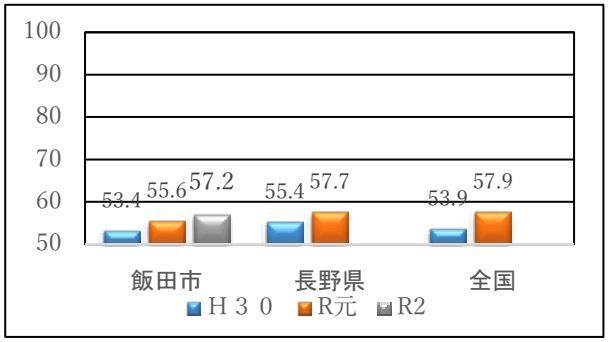


【質問２】算数・数学の勉強は好きですか（学ぶことへの興味・関心）

［小学校児童］

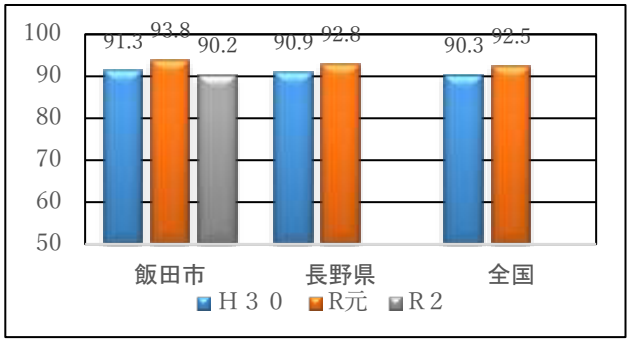


［中学校生徒］

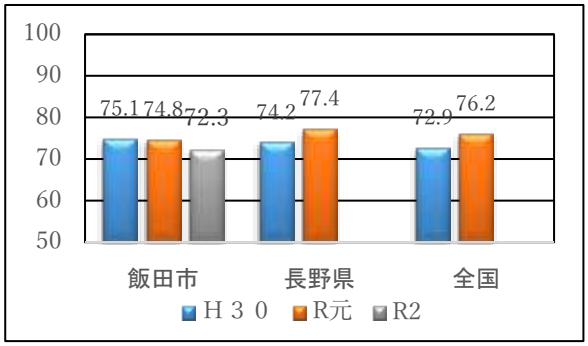


【質問３】算数・数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか
（自己のキャリア形成の方向性と関連つけながら学びに向かう力）

［小学校児童］

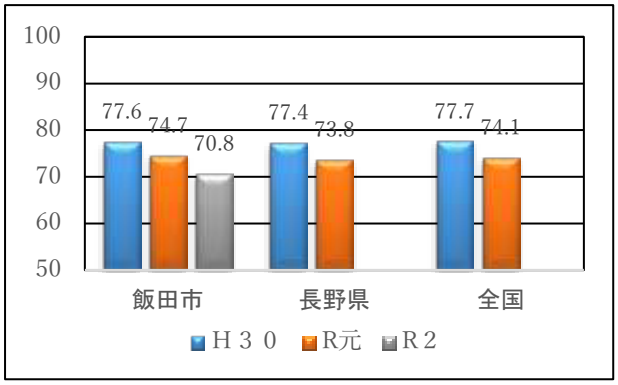


［中学校生徒］

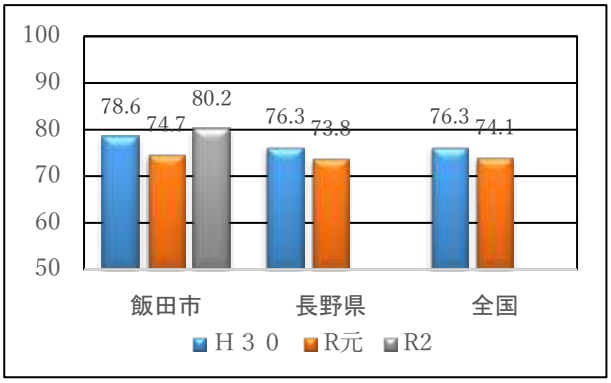


【質問４】学級の友達と話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか（子ども同士の協働学習）

［小学校児童］



［中学校生徒］



新型コロナウイルス感染症の影響で、全国学力学習状況調査が行われなかったが、飯田市では７月に児童生徒質問紙、学校質問紙のみ調査を行い、集計をして経年変化をみることにした。４月、５月は感染拡大の影響で休校が続き、できても分散登校という形で、５月下旬からようやく通常の登校が開始されたが、三密を避けたり、マスクをずっとつけて学校生活を送送ったりするなど、今までの学校生活とは違う環境の中での生活となった。

そんな中で、主体的に学ぶ態度と相関の高い**「【質問１】将来の夢や目標をもっている」**の飯田市の傾向は、小中学生共に減少傾向にあり、どのように夢や目標を持たせていくか校長会でも議論した。キャリア教育とも関連づけながら、身近な大人が夢や目標を語る場面を伝えたり、企業の方々に夢や目標を伝えてもらう場を作ったりしていくことが大切なのではというような意見が出された。

また、このような状況下ではあるが、**「【質問２】算数・数学の勉強は好きですか（学ぶことへの興味・関心）」**と**「【質問４】学級の友達と話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか（子ども同士の協働学習）」**の中学生の肯定的な割合が伸びているのが明るい材料である。来年度の学力学習状況調査の結果に期待したい。

本年度は、休校中でも子どもたちの学びを止めないために、国のＧＩＧＡスクール構想が前倒しになり、飯田市でも９月末に、１人１台のコンピュータ端末が配布され、ＩＣＴを活用した授業改善が加速した。一番の研修の場である小中連携・一貫教育の場で、各中学校区で研修を進めてもらい、どのように授業でＩＣＴを活用したら有効なのか、研究を深めた。その成果が具体的な子どもの変容という形で報告されている。特に、友だち同士の意見を共有して協働追究する場面での使用や、友の意見を参考にしながら自らの考えを深めていく場面での使用について効果をあげている事例が報告されている。

２　ＩＣＴを活用した授業改善の視点から

【実践事例】友だちの考えを瞬時に共有し、その後の情報交換に有効に働いた取組

「拓く」(小中連携通信)の発行を通して各校の ICT 機器を取り入れた学習の紹介や活用例などの情報発信。教職員の ICT 活用のスキルアップへのアドバイスなど行った。

【小学校6年生・社会】

「板垣退助・福沢諭吉・伊藤博文・大久保利通」の中から一人を選ぶ。投票結果グラフや仲間がだれに投票したかタブレットで見る。フリートークの相手を決めて選んだ理由を聞き合う。

同じ選択をしたＢさんから自分とは違う理由を聞き、自分の考えをさらに補強してくれたと喜ぶＡさん。ほかの友だちにも「Ｂさんにも聞いてみ、わかりやすくていいよ。」と紹介していました。違う選択を聞いて「そうか。その方が大切なことだな。」と選ぶ人を変えたＣさん。自分の考えが変わらなかった子どもたちも、友だちの選択や理由を聞いて「なるほど。」と思ったことを学習カードに書いていく。

具体の活動場面の使っているシートの種類や取り組み方がわかりやすく、同じように真似て取り組む学級(担任)も見られた。学習用端末の利用が進む中、取り組みを紹介していくことで自校での活用に繋がっている。また、教育支援主事の支援により、授業のポイント、今後の改善点やよりよい利用について学級担任の授業改善に有効に働いている。

【実践事例】授業の振り返りの場面で、友の考えを共有することにより自分の考えを深めていった取組

「見とどけ対話」とは

学びの自覚化と既習の定着をはかるために、授業の終末の場面において、わかったこと（まとめ）を級友に自分の言葉で対話を通して説明する。

※児童生徒が定着をはかるとともに教師は定着を見とどけることができる。振り返りの時間の確保が充分でなく、設けても振り返りの記述のみであったり、数名の発言のみであったりし、発言しない子どもの見とどけができずにいた授業も多かったと思われる。終末の場面で一人一人が級友と関わることで、子どもの様子を捉えたいと考えた

道徳「ドッジボール対決」で、互いを高め合える友情について考え、授業を通して、自分や級友の考えがどのように広がったり深まったりしたかを振り返った。

子どもの変容の姿から

・『互いを高め合える友情』について、K児は当初「なんでも話せる友情」と記入した。

・その後、スプレッドシートに記入したことについて、児童同士が質問し合い、K児は、H児に「何でも話せるって、例えばどういうこと？」と尋ねられるが、答えられずにいた。H児は「いいこととか、悪いこととかもかなぁ」と独り言のようにつぶやいた。終末に再度「お互いを高め合える友情とは？」についてまとめた。K児は「言いにくいことでも、注意し合える友情」と記入した。H児の独り言のようなつぶやきを聞き、K児が自分なりに考え、「なんでも」をより具体的に表したといえる。

・「見とどけ対話」におけるスプレッドシートの活用は、各校で実践され、以下の点で有効なことがわかってきた　。①口頭による表現が苦手な児童の考えを全体に位置付けられ、該当児童も自信を持てた。②自分の考えでのまとめが苦手な児童も、友の記述を参考にできた。③教師側では、見とどけの内容を類型化しやすく、授業後の分析や次時への問題提起等の繋がりを持たせやすい。それが学習意欲への高まりにつながっている。課題としては、ICT 機器への習熟の違いや学年の発達段階に応じた取り組みが求められる。

【実践事例】共同編集により、友と協働しながら考えを広めていった授業、小中合同の研究会をオンラインで行った取組

小学校５年社会科の授業公開をオンラインで行った。

（東原義訓先生や市教委の皆様の多大なるお力をいただき実施） 児童は Jamboard で貼り付けた自分の考えを仲間分けして名前を付ける共同編集を行った。3 台のカメラで配信され参観者は気づいたことをスプレッドシートにどんどん書き込んでいく。その後、シートをもとに焦点化された授業研究会が行われた。児童は真剣に意欲的に取り組み、共同編集の場面では話し合いながら追究し、授業後には「楽しかった」とつぶやいていた。

【職員の感想】・児童の真剣で意欲的な姿から ICT の可能性を感じた。
- Jamboard の効果的な活用の仕方が分かった。授業で使ってみたい。
- 終末の振り返りにフォームの利用はとってもよいと思う。しかし、スプレッドシートで友達の考えを見ながら書くのではなく、自分に向き合うような時間をとるようにして入力したらどうだろうか。
- A 教諭「自分は TB の扱いが苦手なので中核教員の先生に放課後個別にお願いしてスプレッドシート等の使い方を教えてもらい、子ども達も授業で使えるようになった。他にも教えてもらいたい。」

○東原先生から「研修会の様子から、昨年より先生方のレベルがかなり上がっていた。やりとりの内容もレベルアップしていた。学びの深化、学びの転換に向け、環境が整ってきたので、使えるツールを増やし、校区での連携した取り組みをこれからも大事にしてほしい。」効果的な実践について情報共有していきたい。

【実践事例】登校できなくなった一部の生徒に対して遠隔授業を行った取組

７月２８日（火）土砂崩落により通学路（バス）が不通になったため、２名の生徒が通学することができなかった。

登校できない生徒２名（２年生・３年生各１名）に対して、通常の日課で行われている授業に遠隔で参加する形態の授業を計画した。

本校の４～５月の経験をもとに教務主任が日課を編成、教科主任を中心に各教科の指導内容の確認と資料の準備をすすめた。自宅で授業を受ける各生徒には日程や準備などについての連絡を行った。当日は、朝の学級活動の時間から下校のあいさつまでの時間、２年生・３年生の各学級の授業教室２カ所から同時に配信した。特別教室への移動は、休み時間に生徒がタブレットを持って移動した。

＜中学校理科の授業＞

授業中、教師の指示ついてタブレット端末の近くにいる生徒が補足の説明をして手助けし、休み時間にタブレットを介してクラスの生徒が日常会話を楽しむ場面が頻繁に見られた。

【生徒の感想】
- ZOOM で授業に参加するのはおもしろかった。
- 初めてなので緊張したが、いつもと同じように授業を受けることができたと思う。もう１日あればもっと上手にできたと思う。

３　小中の接続の視点から

【実践事例】小学校での取組を生かし、無理なく中学校の学習に発展させた取組

（１）「小学校のまとめとして、自己紹介を完成させて、中学校で自己紹介をしよう」

小学校の外国語活動のまとめとして、また、小学校の「話す」「聞く」活動をさらに中学校の「書く」活動へつなげるために、中学校から「自己紹介のアイデア」を出し、それを使って卒業前に自己紹介を書いてもらうようにお願いした。その自己紹介文は中学校で預かり、最初の英語の授業を使って自己紹介を行うことを考え実践した。自分の名前、好きなこと、得意なことについては小学校で学習したことを活用して例文を見ながら書き、中学校でがんばりたいことについては、「自己紹介のアイデア」の表現と例文を用いて書いた。しかし、コロナ禍による休校により、自己紹介が途中のままで卒業をする児童もいた。

（２）休校中の課題と分散登校中の授業の中で

中学入学後、コロナ禍のため、クラス全体でこの自己紹介を用いて授業することが難しい状況になったこと、自己紹介が途中のままで入学した生徒もいることから、休校中の課題として、「自己紹介のアイデア」を見ながら、自己紹介を書いてくることを課題とした。

分散登校中、課題の自己紹介を確認するために、教師と生徒とのやり取りの中で、一人ずつ自己紹介を行った。コロナ禍の制約があったため、生徒同士でやり取りをすることはできなかったが、小学校からの積み重ねもあり、発音なども正確に、自信を持って自己紹介をする姿が見られた。しかし、これだけで小中連携の自己紹介を終わりにしてしまうのは残念過ぎると思い、教科書 NEW CROWN1 の１学期のまとめとしての単元、「Project１自己紹介をしよう」で活用することにした。

（３）Project 1 自己紹介をしよう

小学校で学習してきた「話す」「聞く」を活かしながら、中学校で新たに文法の成り立ちや、英語を「読む」「書く」活動に取り組み、知識を広めている生徒たちが、小学校卒業時または入学当初の自分の自己紹介を見返して、さらに内容を「広めたり」「深めたり」して、自己紹介を書き、発表する授業を行った。まず、今までの学習の中で行ってきた自己紹介の内容と、教科書の Lesson を通して学習したことを確認した。今までの自己紹介に、さらに情報を付け加えたり、自分の大切なものや人についても紹介したりすることで、相手に自分のことをよりくわしく伝えることができる、知ってもらうことができる自己紹介を書いて、発表を行った。

【生徒の様子】

A 生の自己紹介のひろがりと深まり（内容のひろがり）

I want to make some friends in junior high school.という願いを持ち、中学校へ入学してきた A 生。後半では、その願いが叶い、自分の友だちについて紹介する記述が見られた。

B 生の自己紹介のひろがりと深まり（内容の深まり）

Lesson４で学習した表現を参考にしながら、I’m good at table tennis.について、ボールを紹介したり、いつ、どこでプレーしたりしているかの話題を付け加えて、書くことができた。

授業後の子どもの声(アンケートより)

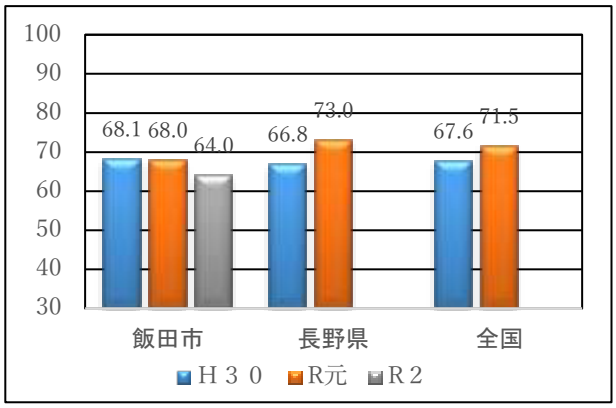
「小学校の外国語活動のまとめとして自己紹介を「書く」ことをしました。（コロナ禍により、休校中の課題にもなりました）その自己紹介は、中学校での授業に役に立ちましたか？

・自分のことを簡単に教えてあげることができたからよかった。
・自分の名前、好きなことの紹介でのコミュニケーションが役に立った。
・小学校で自己紹介文は書けなかったけど、中学校になる前に、クラスで自己紹介したことがしっかり役に立った。
・自己紹介でどのようなことを言えばよいかが分かっていたのでやりやすかった。

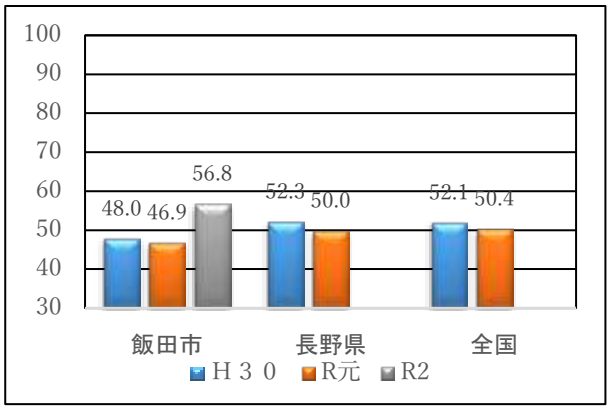
４　家庭学習の視点から

【質問５】家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか

［小学校児童］



［中学校生徒］



「自分で計画を立てて勉強をするかどうか」の質問項目は、全国や長野県に比べ、飯田市では低い傾向が続いている。中学校で言うと昔ながらの４点セットからなかなか抜け出せない実態があることが考えられるが、本年度は、全国との比較はできないものの、前年度から比較すると、約１０％伸びている。少しずつではあるが、自ら取り組む家庭学習が浸透しつつあると考えられる。引き続き学力向上のために、授業改善と合わせて改善を図っていきたい。

【実践事例】ＩＣＴを活用した家庭学習への挑戦の取組
中学校社会科の授業と関連づけた家庭学習

図１は授業内、図２は授業後に家庭において共同編集で生徒が作成したものである。
図２は、内容が充実し、文字色や背景を変えたり、画像等を挿入したりして、読み手を意識した工夫が見られた。

図１

図２

生徒の感想から

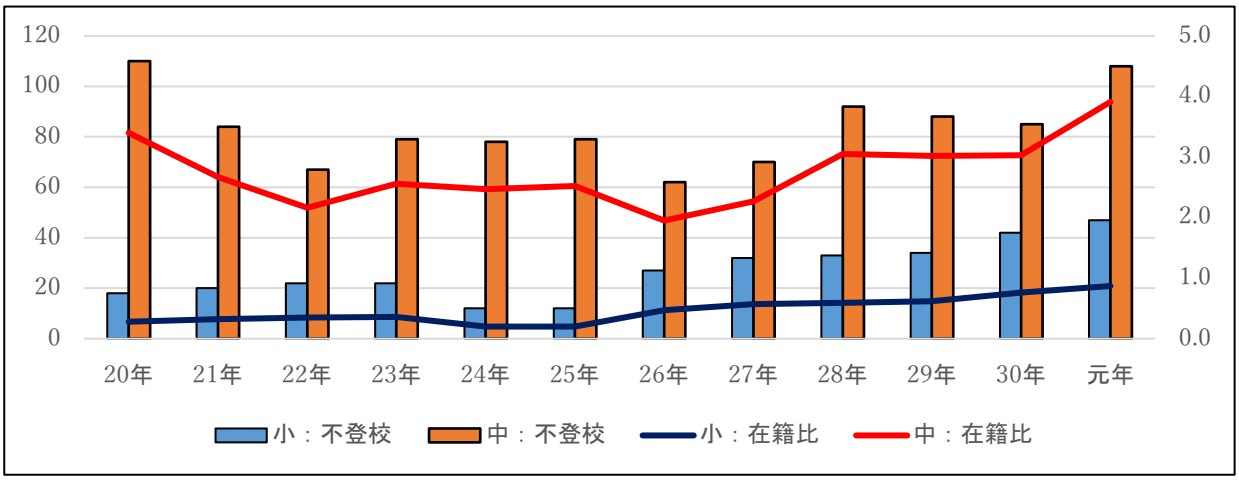
○みんなで編集できたのでやりやすかった。たくさん意見をもらって分かりやすくできたと思います。

○家でもみんなで『調べ学習』ができたので、こんな勉強の仕方もあるんだなぁと思った。

Ｂ　人間関係づくり

１　不登校児童生徒の現状

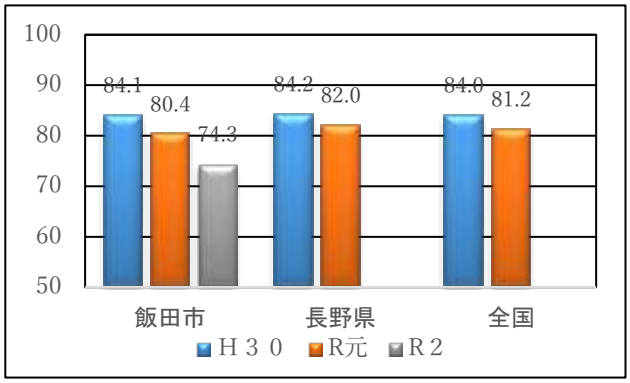
飯田市の不登校児童生徒数と在籍比の推移〔平成 20～令和元年度〕



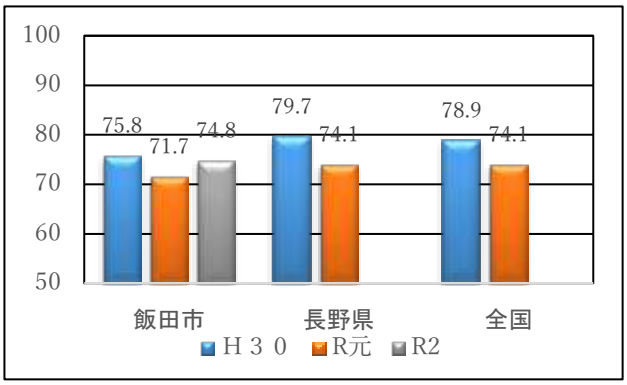
２　「互いの良さを認め合える」授業・集団づくりの視点から

【質問６】自分には、良いところがあると思いますか（自己肯定感）

［小学校児童］

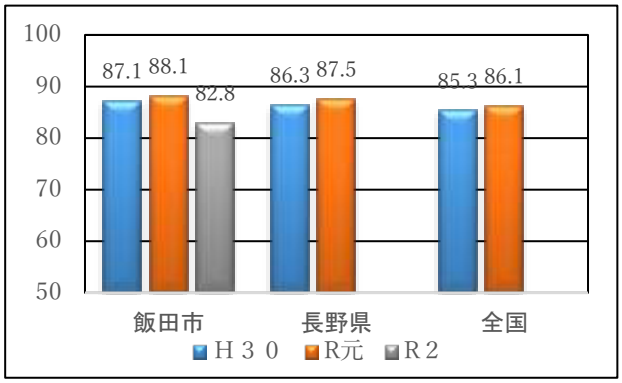


［中学校生徒］

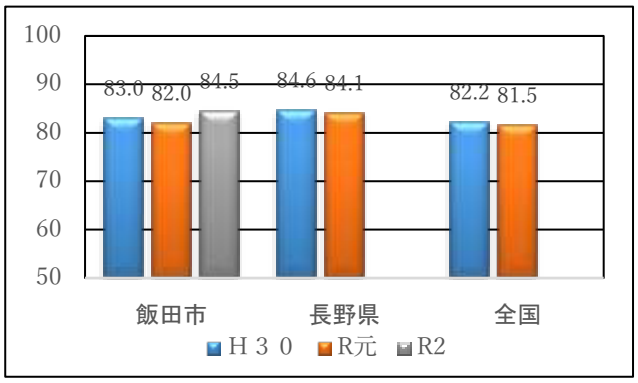


【質問７】先生は、あなたの良いところを認めてくれていると思いますか（自己肯定感）

［小学校児童］

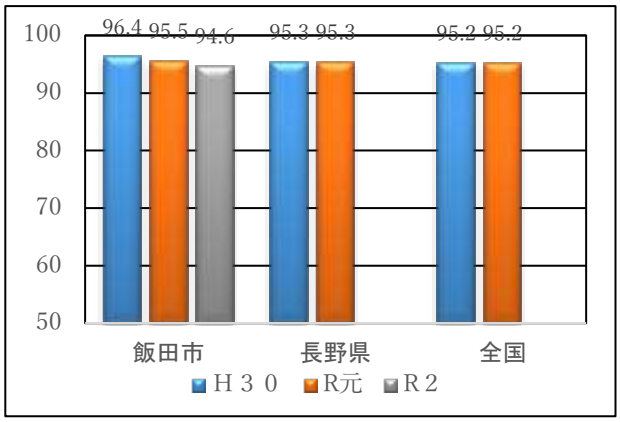


［中学校生徒］

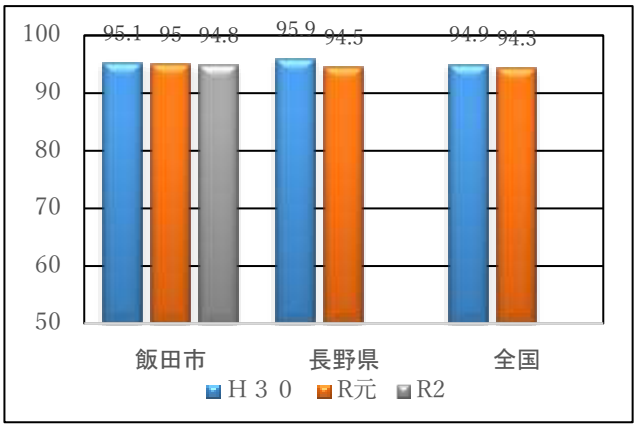


【質問８】人の役に立つ人間になりたいと思いますか（自己有用感）

［小学校児童］

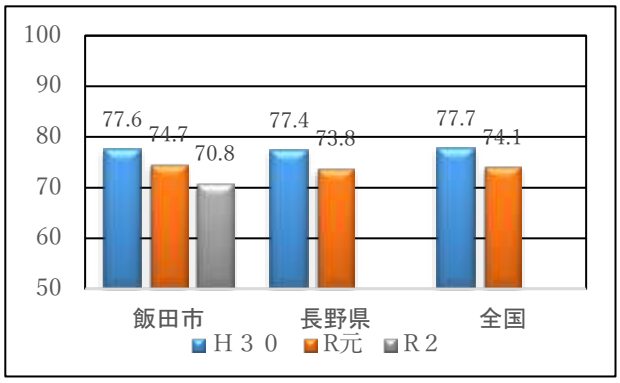


［中学校生徒］

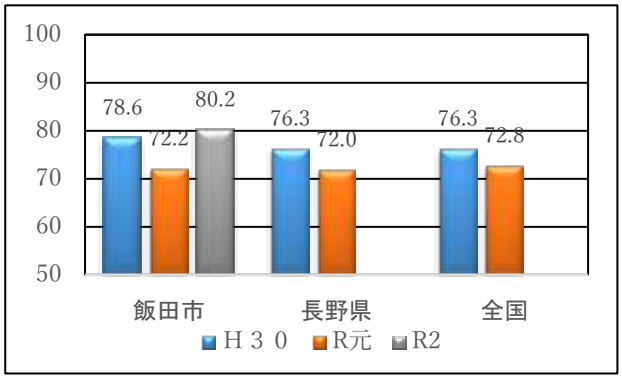


【質問９】学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思う。

［小学校児童］



［中学校生徒］



不登校の児童生徒の割合は、全国と同じ傾向で、小学校では徐々に増え、中学校では小中連携・一貫教育を取組始めた頃の数値に戻ってしまっている。引き続き、中学校区毎に配置されている教育支援指導主事を中心に、誰ひとり取り残すことなく、その子に寄り添い、多様な場での学びも視野に入れながら、一人ひとりを大切にした指導を心がけていく。

【質問６】の自己肯定感では、中学校が全国や県の平均と比べて低い値となっている。自己肯定感は、そのまま主体的に学ぶ意欲にもつながるので、様々な場面で子どもたちの取組を認めていくことが大切になる。本年度の**【質問７】**の先生はあなたの良いところを認めてくれていると思うの項目では、中学校の値が伸びているので、引き続き子どもたちの良いところを認め伸ばしていく指導を心がけていきたい。

【質問８】の人の役に立つ人間になりたいと思いますかの値は、ほぼ全国、県平均並みであるが、さらに温かな人間関係の学級づくりを学校生活の基本に据え、どの学級でも実現できるように引き続き研修を深めていきたい。

【質問９】の学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思うの項目では、本年度の中学校の値が伸びてきている。コロナ禍ではあるが、様々な方法で話し合いを工夫している成果だと考える。引き続き話し合い活動を大切に考えていきたい。

【実践事例】ＩＣＴを活用し、不登校の生徒が授業に参加した取組

パソコン配布後の様子：担任が校内中間教室でＢ生に TB の使い方を説明する中で、学級でのスプレッドシートを使った“しりとり”に誘った。「顔を見せるのはちょっといやだけど、文字ならいいよ」と中間教室から久しぶりにクラスの友達とオンラインでつながり笑顔を見せていた。

生徒の感想：Ｂ生「久しぶりにみんなと授業をしたときはちょっと緊張したけど、みんなと同じことができたのはよかった。」

これなら道徳でもつながることができるかもと考えた担任は、翌週の道徳に誘った。『じこちゅう（光村２年）』で「考えの違いを尊重するためにどんなことが大切なのか」について友達の考えを見てみないかなと投げかけたところ、「文字だけなら」と自分の考えを入力した。その後学級では全員の考えをもとにさらに考えを深めていった。Ｂ生の画像は流さないが、学級からは Zoom で授業の様子や板書を流した。

生徒の感想：Ｂ生「その人のいろんなことを気を配って生活する。見える場面だけじゃなく見えない場面にも気を配ってみる。わかってもらえるようにちゃんと伝える。」と記述し、終末には「面と向かうとできないけど、みんなの考えが聞けるのはよかった。参加しやすいし、楽しかった。」と感想を教育支援指導主事に伝えた。

・クラス「Ｂ君が来てくれてすごくうれしかった。Ｂ君が今、何を打っているかわかって、離れていてもすごく身近に感じた。」「離れていても、同じことをＢ君も考えていて、考えがわかりあってうれしかった。」

・担任から TB を使う授業について聞くと「クラスの人と直接しゃべるのは少し抵抗があるけど、文字ならやりとりしやすい。離れていてもみんなと同じ作業ができてうれしい。顔を合わせなくても話し合いができるのはすごい。」と話し、３学期は週四（火水木金）校内中間教室に通いたいと方向を伝えてくれた。

【実践事例】リモートの活用により、離れた場所からの交流を行い人間関係を広めた取組

４年生は、市内でも行ったことがない南信濃を社会見学の目的地とした。見学前に、リモートで先方の小学校４年生と顔合わせした。子どもたちは南信濃や霜月祭のことについて紹介した。一方自分たちが調べてきた学校の歴史について紹介した。

見学当日、和田城では、実際に会うことができ、霜月祭のことを詳しく教えてもらった。

【児童の感想及び様子】

「初めて会ったときは緊張したけど２回目は仲良くなれた。霜月祭の説明はすごくよく分かりました。帰ってから和田小学校の人の発表がどうしてよかったか話し合いました。準備でもう少しみんなで練習できれば、もっとよかったかもしれない。もっと質問したかった。次の交流が楽しみです。」と語った。すでに自分たちの調べたことは学級内で発表し合っている子どもたちだが、相手校の紹介のよさが刺激となり、自分たちの紹介を振り返って課題が見え、相手意識をもつことができた。

霜月祭について知り祭りに関心を持った子どもたちは、「祭新聞を作りたい。」と地域の獅子舞やお練り祭、霜月祭について調べまとめることができた。また、総合の発表会では全校に向けて、学習してきたことをわかりやすく伝えようと、グループで話し合いや練習を重ね、工夫して取り組むことができた。「ことばも考えてはっきりといえてよかった。」という感想を持つことができ、次回の子どもたちの訪問を楽しみにしている。

交流が続いていきそうだ。

３　小中接続の視点から

【実践事例】６年生が中学校の文化祭にリモートで参加した取組

コロナ禍だから６年生が中学校文化祭を見学できない。では、ZOOM で繋いで見学しよう

例年なら６年生が中学校の文化祭を見学に行き、雰囲気を感じたり中学校生活への憧れを抱いたりする良い機会となっているが、今年はコロナ禍で高陵中文化祭への見学が不可能になった。そこで、夏休みの合同職員研修を生かし、３校を ZOOM で繋いで、６年生はライブ中継で高陵祭の様子を参観することができた。　開会式・英語劇などは一方的に参観するだけだったが、グループ討論会には２つの小学校の代表者が感想を述べる場面も取り入れ、６年生も「自分たちも参加した。」という満足感を得ることができた。

【6年生の声】・リモートでの参加だったけど、中学生がやっている雰囲気とかがわかって、来年参加するのが楽しみになった。中学生の人たちがどんどん意見を言っているのを見て、すごいと思った。

・私たちが思っている以上に中学校の文化祭はすごいことをやっているのだと分かった。

・今回リモートを見せてもらったら、思った以上に人数が多くてびっくりした。まだ、不安はあるけど今回のを見たら楽しそうだったので、制服を着るのが楽しみになった。

・来年は、自分もあの会場に居て、今日見たようなことをするのか、と分かって安心したけどやっぱり緊張もする。でも楽しそうだったから、少し楽しみ。

４　特別支援教育の視点から

【実践事例】中学校体験学習や中学校訪問でスムーズな接続に心がける取組

小学校特別支援学級の５，６年生の児童が中学校を訪問し，中学校の特別支援学級の授業を参観したり，交流したりする活動を行った。

小学生，特に特別支援学級の児童にとって「中学校はどんなところだろう」という気持ちは強く，事前に児童にとった「おしえて先輩。中学校ってどんなところ？」というアンケートに中学生が答える形で交流会を行った。小学生からの質問は「中学校生活は楽しいですか？」「中学校の給食はおいしいですか？」といった大きな質問から「制服の下には，何を着るんですか？」「中学校は，おりがみとかできますか？」といった細かな質問まで，丁寧に答えている様子が見られた。

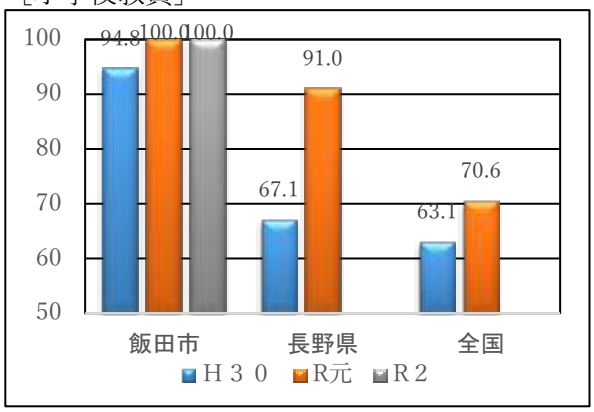
【体験した児童の声】「自分の知っている先輩ががんばって勉強している姿に感動した。自分もがんばらなければいけない」「中学生になるとむずかしい勉強をするんだと思った。部活動が楽しみだ」「今日は中学校に行ってきました。学校はとても広かったです。たっきゅうがとてもたのしそうでした。」「ちゅうがっこうにいってきました。すごくて一日でまいごになりそうです。ぶかつのなかでたっきゅうにないりたいです。」

【保護者の声】小学校と中学校との支援学級での学習のあり方がちがうので早くに説明会を開いていただきありがたかった。子どもたちがスムーズに進学できるように体験をさせていただくとありがたい。

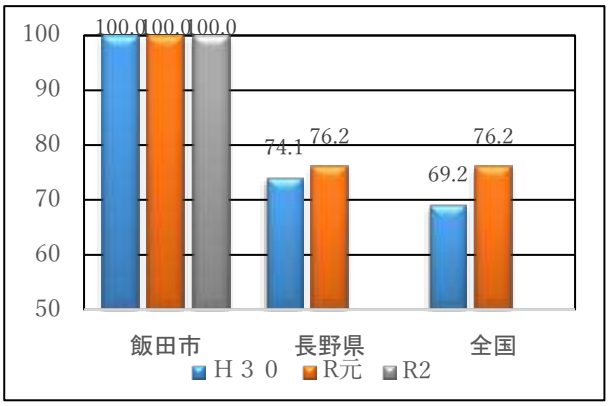
Ｃ　９年間の教育課程

【質問 10】近隣の小中学校と、授業研究を行うなど、合同して研修を行いましたか

［小学校教員］



［中学校教員］



平成 23 年度から全中学校区で進められている「小中連携・一貫教育」は、探索期 4 年間・深耕 4 年間を終え、今年度は充実期 2 年目として、それぞれの中学校区で展開されている。

【質問 10】の結果から、中学校区毎の授業研究や合同研修が、全国や県と比較して確実に浸透していることがわかる。小中連携・一貫教育を行うこと自体が目標になってしまってはいないかという意見もあるが、引き続き、教職員の一番の研究や研修の場としての小中連携・教育を推進し、9 年間を見通した指導の充実を図っていきたい。

【実践事例】コロナ禍だからこそ地域との連携を大切にした「ふるさと学習」

地域の人・もの・こととのつながりを大切にした地域題材

①地域を知る授業（9/2）・・・千代小では、よこね田んぼ保全委員会・会長（法全寺）から、よこね田んぼの歴史や、よこね田んぼに寄せる地域の方の思い等について講話をしていただいた。

【児童の感想】

・江戸時代からあったなんて知らなかったです。今度の稲刈りもがんばります。（2 年女児）

・古くから伝わる田んぼをいろんな人たちが守ってきたことを知ってすごいと思った。私が稲刈りをするときは、ありがとうという気持ちで稲刈りをしたいです。（3 年女児）

・よこね田んぼの由来の漢字には、どれも人々の思いがこもっていそうな漢字だった。（4 年女児）

・ぼくの家はよこね田んぼの奥にあるので、いつも学校へ行く時帰る時にきれいな風景が見られます。夕方になると赤オレンジっぽい色になってとてもきれいです。（6 年男児）

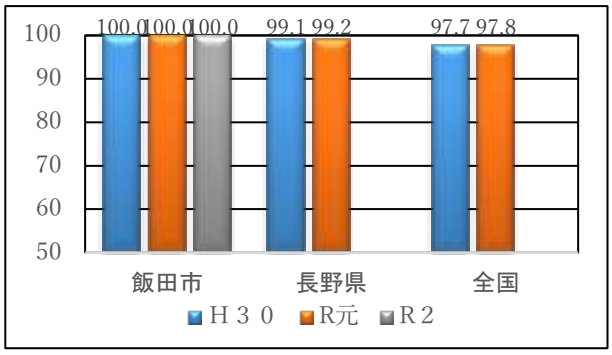
・今まで地域の人たちがたくさん工夫し頑張ったから「今はこんなにきれいなんだ」と思いました。これから地域の人たちとこのままのよこね田んぼを次へ繋ぎたいです。（6 年女児）

このあと行われたよこね田んぼの稲刈り（Ｔ小、Ｈ小、Ｒ中１年）にも、意欲的に取り組むことできた。地域の方の言葉には、地域を愛する思いが込められており、自分の住んでいるふるさとを誇りに思う心情が深まった。

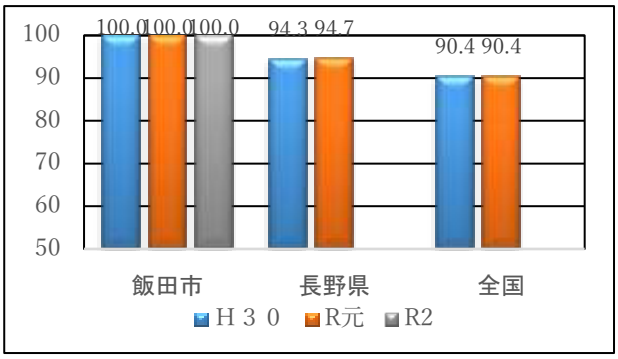
D　組織の構築

【質問 11】保護者や地域の人が学校の美化，登下校の見守り，学習・部活動支援，放課後支援，学校行事の運営などの活動に参加していますか

［小学校教員］

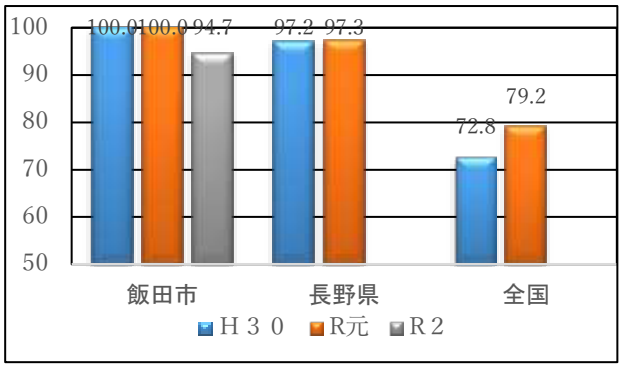


［中学校教員］

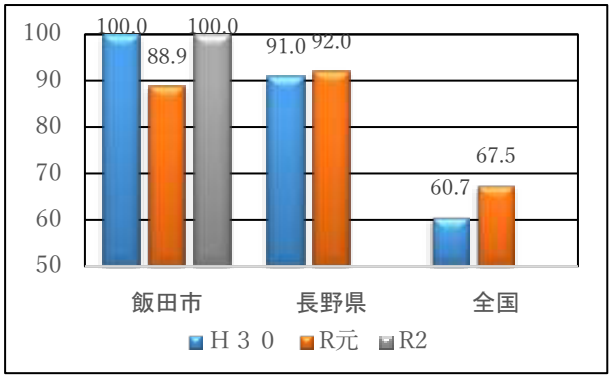


【質問 12】コミュニティスクールなどの仕組みを生かして、保護者や地域の人が学校の美化、登下校の見守り、学習・部活動支援、放課後支援、学校行事の運営などの活動に参加していますか

［小学校教員］



［中学校教員］



【質問 11】より、保護者や地域の方々が、学校支援活動に飯田市では全ての学校に継続して協力していただいていることがわかる。引き続き地域と共にある学校を目指し、積極的に地域の方々の力をお借りしての学校運営に心がけていく。

【質問 12】より、平成 28 年度よりスタートしたコミュニティースクールの仕組みも十分に軌道にのってきていることがわかる。地域、家庭、学校のそれぞれが主体になって地域の子どもたちを育てる組織の構築が殆どの学校で機能している。コミュニティースクールが軌道にのってきたことと、コミュニティスクールの主体を学校から公民館へ移管していくことを踏まえ、４つの窓口の１つである「組織の構築」は本年度で一区切りの方向で考えていきたい。

【実践事例】新型コロナウイルス感染症拡大に伴う臨時休校中に、学校運営協議会の協力を得て、各家庭にネット環境を整え、オンラインでのつながりを実現した取組

Ｗ小学校では、全戸にＷｉ－Ｆｉ環境を整えることができ、授業を実施することができた。Ｗｉ－Ｆｉ環境の整っていない家庭には、学校からの願いを受け、学校運営協議会が業者にも積極的に働きかけ、早急にネットがつながる環境を整え、全家庭を結んでのオンライン授業が実現した。これにより、コロナ禍での休校中にいち早く、子ども同士、子どもと教職員のつながりを実現することができ、子どもたちの不安を和らげることができた。

Ⅴ　令和２年度の総括と令和３年度の方向

（１）令和２年度の成果と課題　　〇成果と思われる点　●今後の課題と思われる点

全体を通して

〇「充実期」２年目にあたり、各中学校区の実践について、具体的な「子どもの姿の変容」に着目しながら、子どもの姿で取組の成果を評価することができた。本年度はコロナ禍での学校生活で、様々な活動制限のある中での取組であったが、各中学校区で工夫していただき、子どもたちの前向きに取り組む姿が随所に見られた。特に計画段階で、幅広く総華的に全てのことに取り組もうとしている中学校区が多かったが、話し合いの中で、今年は自分たちの中学校区はこのことを重点的に取り組むというものを焦点化して取り組んだ方が良いという意見のもとに、各中学校区では、それぞれの特徴を生かして取り組み、それぞれの成果を具体的な子どもたちの変容の姿として実際の子どもの姿で語っていただいており、成果が見えやすい形になった。

〇本年度は、ＧＩＧＡスクール構想がコロナ禍の影響で前倒しになり、一人１台のパソコンが子どもたちに貸与された。どうやって使用したら良いのか手探りの状況であったが、小中連携・一貫教育の場が一番の研修の場であるので、実践をお願いしたところ、具体的な好事例がたくさん集まり、全市で共有することができた。

●４つの窓口全てから取り組みを振り返っていくと、幅広い取り組みになってしまい、深まりという点で課題がみられた。また、地域と共にある学校の視点でみた組織の構築では、コミュニティースクールが全ての学校で立ち上がり機能し始めた。来年度は、小中連携・一貫教育を立ち上げた原点に回帰し、学力体力の向上、人間関係づくりに焦点を当て、義務教育 9 年間でどのように中学校区で子どもたちを育てていくかを深めたい。

Ａ　授業改善

〇中学校区毎に開催される合同研修会では、「授業改善」を中心に「学力向上『結い』プラン」の実現を目指して共通理解が図られている。特に本年度はＩＣＴの有効活用を中心に、どの中学校区でも積極的な研究が図られた。来年度は、自ら取り組む家庭学習の実現と合わせ、学力向上を目指し、さらなる授業改善に取り組んでいきたい。さらにどの子にもわかる授業を目指し、読解力の向上の視点も取り入れていきたい。

Ｂ　人間関係づくり

〇不登校児童生徒は全国の状況と同じく増加傾向であるが、小学校から中学校への丁寧な接続は継続して行われている。様々な特性をもつ子どもたちに多様な居場所やＩＣＴを活用した多様な学びの方法が研究されつつある。

Ｃ　９年間の教育課程

〇「キャリア教育」「外国語」を中心に、小中連携した教育課程が定着してきている。さらに、他の教科や学習活動でも、小中の接続を意識した様々な活動が行われている。コロナ禍でもリモートを使用するなどして中学校区毎工夫して取り組むことができている。

Ｄ　組織の構築

〇コミュニティースクールが全ての学校や中学校区毎に設置され、地域、家庭、学校のそれぞれが主体となった取り組みが深まりつつある。成果の報告書も別に作成される。

（２）令和３年度 小中連携・一貫教育（各中学校区）の方向（案）

１　めざす子ども像の達成のために、各中学校区の「取組の重点」を、新しい時代に必要となる資質・能力の育成も視野に入れ、保護者・地域とも相談しながら具体的な行動目標で表し、それぞれ推進する。特に力を入れて取り組む重点を１つか２つに絞り込む。

２　取組の成果は、具体的な子どもの変容の姿で評価する。子どもたちの生の姿や声を大切に取り上げていく。必要なものは継続しながら、新たな視点での取組を大切にし、リニア時代に生きていく子どもたちの生きる力を育む。

○「取組の重点」（例）

１　学力・体力の向上に向けて「授業改善」・「自ら取り組む家庭学習」

・全国学力・学習状況調査の結果や全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果などの分析から中学校区の課題を分析し、改善のための取組を小中が焦点を絞って共通で行う。
・新学習指導要領の示す「新しい時代に必要となる資質・能力」を育成するために、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善にかかわる研究を小中合同職員会等で進める。
・学力の基盤となる「温かい人間関係」に基づいた学級の作り方の研究を推進する。
・全ての子が「わかる授業」のための読解力の育成の研究を行う。
・ＩＣＴを活用した協働学習のあり方を深める。
・「自ら取り組む家庭学習」のあり方に向け、小中合同の視点で取り組む。
・「主体性」を育むための夢や目標の持たせ方、「自己肯定感」を高めるための特別活動や家庭での支援のあり方を研究する。
・小学校高学年の教科担任制による指導のあり方を研究する。

など

２　不登校児童生徒数の減少に向けて「温かな人間関係づくり」

・誰ひとり取り残すことがないように、温かな人間関係に基づいた指導のあり方を研究する。
・不登校の未然予防のために、ＳＣやＳＳＷなど外部の専門家の活用を積極的に行い、定期的なスクリーニングや支援会議のあり方を研究し生徒指導を充実させる。
・不登校児童生徒の登校を促すために、小中共通の「不登校支援シート」を用いて長期・短期目標や、方針、役割分担を決めたり、定期的に更新したりするなどのチーム支援で行う。
・様々な特性を抱えた子どもたちの多様な場での学びのあり方を研究する。
・小学校高学年の教科担任制による、多くの教職員の子どもたちへの関わりの効果を考える。

など

３　小中のスムーズな接続に向けて「９年間の教育課程」

・一貫カリキュラム（外国語教育）、（総合的な学習の時間・キャリア教育）などの修正を行う。
・小中共通の「授業規律」や「学習習慣」、「家庭学習の約束」などを決め出し、指導を行う。
・体験学習、小中合同授業、出前授業、交流会など多様な小学校と中学校の協働の場を考える。

など

（３）令和３年度 小中連携・一貫教育推進委員会の方向（案）

１　推進委員会　年２回
・「（小中連携・一貫教育の）方針の策定及び全体調整を行う（要項第２条）」
・委員の構成はＲ２と同じ

２　部会　年４回（第１回部会は、第１回推進委員会時に行う）
・「調査研究を行うために部会を置くことができる（要項第７条）」
・部員の構成は学識経験者（2 名）、中学校区代表校長（9 名）、教育支援指導主事（7 名）、事務局。取組の重点に沿って研究を深める。結果を最終の委員会で報告。

（４）令３年度 推進委員会・推進部会 日程（案）

中学校区（例）		飯田市教育委員会
○年度当初の打合せ （校長・教育支援指導主事等）	４月	○第１回校長会・教頭会
○中学校区合同職員会等① ※年間の方向性（先生方一人ひとりが子どもの変容の姿を追うこと）の確認	５月 ６月	○教育委員会５月定例会 ○推進委員会①・推進部会① ６月第一週（議会前）R2 は 6/11
○中学校区合同職員会等② ※子どもの変容の姿で検証 1/2	７月 ８月	
	９月	○推進部会② ９月第一週 R2 は 9/8 ※「取組内容【行動目標】」の評価
○中学校区合同職員会等③ ※子どもの変容の姿で検証 2/2	１０月 １１月	
	１２月 １月	○推進部会③ １１月第四週 R2 は 11/24 ○推進部会④ １２月第４週 R2 は 12/24 ※「取組の成果【到達目標】」の評価 ※③ 原稿〆切 11 月上旬 ④ 原稿〆切 12 月上旬
○中学校区合同職員会等④ ※年間の見返しと次年度の方向決め （他中学校区の好事例に学ぶ）	２月 ３月	○教育委員会２月定例会 ２月第二週 ○推進委員会② ２月第二週（議会前）R2 は 2/9 新型コロナ感染拡大の影響で 2/25 ○第５回飯田市校長会・教頭会

○飯田市小中連携・一貫教育推進委員会要綱

平成23年４月13日
教委告示第７号
改正　平成24年３月21日教委告示第５号
平成27年12月25日教委告示第４号
平成28年12月14日教委告示第21号

（設置）
第１条　飯田市の義務教育９年間において、小学校、中学校が相互に連携し、系統的、総合的な指導体制及び教育環境の充実を図る具体的な検討を行い、もって一貫性のある効果的な教育（以下「小中連携・一貫教育」という。）を推進するため、飯田市小中連携・一貫教育推進委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（所掌事項）
第２条　委員会は、次に掲げる事項の方針の策定及び全体調整を行う。
(1)　小中連携・一貫教育の指導体制及び教育環境に関すること。
(2)　小中連携・一貫教育の教育課程に関すること。
(3)　その他小中連携・一貫教育に関すること。

（組織）
第３条　委員会は、委員21人以内をもって組織する。
２　委員は、次に掲げる者から飯田市教育委員会（以下「教育委員会」という。）が委嘱する。
(1)　学識経験者
(2)　地域代表者
(3)　学校教職員
(4)　児童生徒の保護者
(5)　学校運営協議会委員
(6)　公民館関係者
(7)　その他教育委員会が適当と認める者

（任期）
第４条　委員の任期は、１年とし、再任を妨げない。

（委員長等）
第５条　委員会に委員長及び副委員長各１人を置き、委員の互選によりこれを定める。
２　委員長は、会務を総理し、委員会を代表する。
３　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

（会議）
第６条　委員会の会議は、委員長が招集し、委員長が議長となる。
２　委員会は、委員の半数以上が出席しなければ、会議を開くことができない。

（部会）
第７条　委員長は、第２条に規定する委員会の所掌事項に関して、調査研究を行うために部会を置くことができる。
２　部会員は、部会設置の目的に応じて教育委員会が委嘱する。

（意見の聴取等）
第８条　委員長は、必要があると認めるときは、委員以外の者を会議に出席させて意見を聴き、又は資料の提出を求めることができる。

（庶務）
第９条　委員会の庶務は、教育委員会事務局学校教育課において行う。

（その他）
第10条　この要綱に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

前　文（抄）
平成23年４月13日から施行する。

前　文（抄）（平成24年３月21日教委告示第５号）
平成24年４月１日から施行する。

前　文（抄）（平成27年12月25日教委告示第４号）
平成28年４月１日から施行する。

前　文（抄）（平成28年12月14日教委告示第21号）
平成29年４月１日から適用する。